蜃気楼

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蜃気楼

【Ｎコード】
Ｎ４２５０Ｖ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
砂漠を彷徨う二人。その二人が蜃気楼を見る。そしてその蜃気楼に導かれて。砂漠の蜃気楼を題材にしてみました。

第一章

蜃気楼

成田浩昭と山縣麻耶はだ。困った状況にあった。
二人は遭難していた。しかも砂漠の中でだ。
浩昭は背が高く逞しい顔をしている。筋肉質で黒髪を立たせている。目の光は強く四角い面長の顔のパーツはどれも引き締まっている。
その浩昭に対して麻耶はいささか優男で背は一九〇近い浩昭より十センチ位低い。色は白く優男であり黒髪には癖がある。目は少し垂れている。
その二人がだ。砂漠の中を歩きながらこう話をしていた。
「なあ山縣君」
「何ですか、成田さん」
「ここは一体何処なんだ？」
浩昭はこう麻耶に尋ねるのだった。
「一体全体」
「何処かですか？」
「そうだ。何処なんだ？」
「それがわかってれば遭難していないと思いますか？」
麻耶の言葉はだ。まさに核心だった。
「ですよね。地図もなくなりましたし」
「そうだね。参ったな」
「それに地図があってもです」
それでもだとだ。麻耶は浩昭に対して話すのだった。二人は何とか立ってそうして前に進んでいる。しかしそれでもなのだ。
周りに見えるのは砂ばかりだ。あとは頭がくるまでに照っている太陽、そして意味もなく青い空、そうしたものしか見えない。まさに砂漠だ。

その中を二人で進んでだ。話をするのだった。
「こんなところで意味がありますか？」
「ないね。確かに」
「水もないですし」
砂漠だから水がない。恐ろしい現実である。
「食べ物もないですし」
「砂漠の動物はいるよ」
「蠍や蛇ですけれど」
名前を聞いただけで嫌になる動物達だ。
「どうします？刺されたり噛まれたりするのを覚悟で捕まえて食べますか？」
「毒、あるよね」
「絶対にありますね」
そうした動物だ。ならばこれまた当然のことだった。
「それは」
「ううん、じゃあこのまま遭難し続けて」
「挙句は野垂れ死にですね」
「いやいや、そうはならないよ」
浩昭はだ。まだこう言うのだった。
「俺達は助かるよ」
「そう言える根拠は何ですか？」
「何となくだけれど」
「何となくですか」
「ああ、俺達は助かるよ」
こう麻耶に話すのだった。
「絶対にね」
「まさか。そんなことを言っても」
「まあ助かると思った方がいいよね」
「ええ。飛行機が墜落した時も終わったって思いましたから」
二人が何故今この砂漠にいるかというとだ。操縦しているセスナ

が墜落してしまったからだ。二人はそのセスナから何と脱出してここにいるのだ。
何とか怪我はないがそれでもだ。二人は遭難していた。そうして今はこうしてだ。砂漠を彷徨っているのである。だからここにいるのだ。
「けれどこうしてですね」
「生きてるじゃないか」
「つまり俺達は運がいいっていうんですね」
「運がいいから生きてるんだよ」
それでだという浩昭だった。
「だからその運と神様と仏様を信じてね」
「そうしてそのうえで、ですね」
「行こう。いいね」
「わかりました。それじゃあ」
こうしてだった。二人は砂漠を進んでいく。そうして一時間程進んでいくとだ。その前にだ。あるものが浮かび出てきたのだった。
街だ。栄えている街だ。それが出て来たのだ。だがそれはだ。
「蜃気楼だね」
「ですね。間違いなく」
二人で話すのだった。誰が見てもだった。

第二章

「朦朧としてるね」
「下の方が消えてますし」
「蜃気楼としか思えないね」
「ですから無視しましょう」
「いや」
ところがだ。浩昭はだ。
ここでだ。強い声になってこう麻耶に言った。
「あそこに行こう」
「えっ、蜃気楼にですか？」
「そうだ、行こう」
こう麻耶に言うのである。
「あの蜃気楼のところにね」
「あの、蜃気楼ですよ」
麻耶は怪訝な顔になってだ。そのうえで浩昭に問い返した。
「それでもですか？」
「それでもだよ」
また強い声で言う浩昭だった。
「あそこに行こう」
「行っても何もありませんよ」
「いや、それでも行かないよりはね」
「ましだっていうんですね」
「少なくとも歩いたままじゃこのまま野垂れ死にだよ」
残念な現実である。まさにその通りだ。
「けれど。若しかしたらね」
「蜃気楼の先に何かあるかも、っていうんですね」
「そうだよ。だから行こうよ」
蜃気楼の向こうのその栄えている街の姿を見てだ。浩昭は目を輝

かせている。そのうえでだ。麻耶に対して告げているのである。
「蜃気楼のところにね」
「本当に何もなくてもですね」
「ああ、行こう」
その言葉は変わらない。そこまで聞いてだ。
麻耶もだ。遂にだ。浩昭のその言葉に頷くのだった。
「わかりました。それじゃあ」
「行くんだね、山縣君も」
「このままあてもなく彷徨っていても野垂れ死にしかありませんし」
それなら仕方ないとだ。理由を付けてはいたがそれでもだった。
彼も決意した。そうしてであった。
浩昭と共にだ。前に踏み出す。砂漠の不安定な、踏み締めればそれだけで崩れてしまう下地を前へ前へと進んでいくのだった。
蜃気楼は遠ざかるばかりだ。その距離は縮まらない。全くだ。
だがそれでも二人は進んでいく。あくまで進んでいく。
しかしその中でだ。彼等はだ。
あるものを見ていた。それは何か。浩昭が言った。
「何かね」
「ええ、妙ですけれどね」
「希望？それが見えてきたかな」
笑顔でだ。浩昭は麻耶に話すのだった。
「このまま進んでいけばひょっとしてね」
「辿り着けますかね、そして助かりますかね」
「うん、いけるよ」
こう麻耶に話すのだった。
「ひょっとしたらだけれど」
「ですね。少なくとも目指す場所はできましたから」
「じゃあ先に進むか」
「はい、そうしましょう」
こう言ってだ。二人は前に進む。そしてだ、

やがてだ。二人はだった。その前に。
街はなかった。しかしだった。そこにはだ。
オアシスがあった。しかもだ。

第三章

小さな集落もあった。その集落にはだ。
人がいた。そのうえで彼等を見てだ。現地の言葉で尋ねてきたのである。
「あの、あんた達は」
「俺達かい？実は」
浩昭がだ。その現地の人に対して話すのだった。
「遭難してたんだよ」
「乗ってた飛行機が墜落してね」
麻耶も話す。
「それでなんだよ」
「何とかここまで来たんだ」
「おお、それは大変だったねえ」
現地の人はそれを聞いて同情する声で述べてきた。
「けれど何とかここまで来たんだね」８
「本当に何とかな」
「助かったよ」
「いや、よかったよ」
現地の人は二人の話を聞いて述べた。
「本当にね。生きていてね」
「ああ、それでな」
「ちょっと連絡したいけれど」
日本の大使館にである。そこに連絡をすれば何とかなるからだ。
確かに問題のある外務省だがそれでも大使館の存在は有り難いのだ。
それでだ。あらためて話す二人だった。
「いいかい？電話あるかい？」
「それは」
「あるよ」

あっさりと答えた現地の人だった。
「じゃあ使うんだね、その電話を」
「ああ、そうさせてもらう」
「早速な」
「わかったよ。それにしてもあんた達運がいいね」
現地の人はここでこう話したのだった。
「砂漠からこの村まで来られるなんてね」
「ああ、広い砂漠だよな」
「まるで海だったよ」
「この辺りで村はここだけだよ」
現地の人はこのことも話す。
「他にはないからな」
「このオアシスだけか」
「じゃあ本当にここに辿り着けなかったら」
「死んでたね」
最悪の事態をだ。あっさりと話す現地の人だった。
「そういう意味でも運がよかったよ」
「そうだな。これはな」
「蜃気楼のお陰ですね」
二人はそのことを実感したのだった。話をしているうちにだ。
「あの蜃気楼に向かっていなかったら」
「どうなっていたか」
「蜃気楼って？」
現地の人は二人のその言葉にふと目を止めた。
そうしてだ。二人にあらためて尋ねるのだった。
「蜃気楼がどうしたってんだい？」
「いや、こっちの話だよ」
「俺達だけのな」
「ふうん。何かわからないけれど」
それでもだとだ。現地の人は話すのだった。

「あんた達が助かったのは確かだな」
「ああ。人間何に助けられるかな」
「本当にわからないな」
ほっとした顔で話す二人だった。そうなったのである。
何はともあれ二人は助かった。だが砂漠の幻にしか過ぎないその蜃気楼に導かれる形で助かったことはだ。言っても殆どの人間が信じてくれなかった。しかし二人にとってはそれが真実だった。砂漠の幻に助けられたことはだ。

蜃気楼　　完

２０１１・３・２２

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4250v/

蜃気楼

2011年8月2日03時28分発行